

いるらしい、ちょっとスイッチをヒネれば電燈はつくのである。ついにあきらめて、一人がマッチをすり、別の一人が洋服ダンスの中のものを引き出す。マッチが消えると闇になる。このような動作を繰り返して取っていった。

われわれ隣組が相談し、ソ連兵が来たら近隣の者が石油缶や鍋を叩いて大きな音を出すことにした。侵入者は、ゲーペーウなどが聞きつけてくることを恐ろしいへん効果があった。

ソ連兵の引き揚げたあとに共産軍の八路兵が入って来たが悪い事はしなかった。つくろい物などを要求したが、必ず代価を払った。額の問題ではない。

その後、物取りは何回が続いたが、幸いにして私の所には来なかったので、大変助かった。

ソ連兵が撤退したあと、共産軍が駐屯して、軍政が代って、物取りや暴動を心配したが、中国人の取締りも厳しかったので、世情も安定したのであった。雪解け頃に、国、共、両軍の停戦協定の成立で治安も更によくなり、日本人難民の引揚げが始まった。なんとか

家族共々ぶじに帰国出来た喜びは、同胞の犠牲によって得られたものとの思いで一杯である。

暴民の襲撃

神奈川県 宮沢謙介

時折り、パシッ、ピシッ、と小銃弾がすぐ耳もとの壁にはじける。そのたびに、暗い土間にうつぶせしたみんなの丸い背中が、びくびくつと動く。そのうちの何発かは窓硝子をブスッと破って、家の中に無気味な音を立てて飛んでくる。ここは満州奉天の社宅、暴民に木材は床板まで持ち去られ、レンガだけになった家に同僚の家族、女子寮の娘達、私の妻も二歳の娘を抱いて。誰もが窓の下にハイツクばって、耳を両手でふさいで、じーっとしている。

「頭をあげたら駄目だぞ」注意をする小さな声、相手に聞こえるかと心配するぐらいもう近い、踏みこまれて皆殺しになるか真剣だ。

十五所帯の社宅が、暴民に包囲されて銃弾を打ちこまれていた。あと幾晩こんな息のつまるような暗闇で過ごすだろう。皆でジーツと息を殺している。こちらには守るものは何も無い。無抵抗だ。奉天市の工業地区（現在は中国瀋陽市）の社宅での明け暮れである。昭和二十年八月十五日、日本が戦争に敗れたことをラジオで聞き、茫然自失し、なんとなく安堵を感じ、無念さ、悲しみ、そしてわけの分からない喜びさえ感じていたのもつかの間、この日を境に周囲は一気に戦場となってしまった。

当時私は、光学会社の奉天工場で、明けても暮れても、兵器の製造か修理に追われていた。世界中を相手に戦争を始めてしまった日本は、大工場から家内工場まで働く若者が不足になってきた。私の会社も、満州現地の作業は現地の若者でと数十人を採用して日本で一年間、精密加工の作業を訓練し、その若者とともには満州に赴任した。

建物はできていたが、作業設備がすべて一からであり、それに加えて生活や言葉の異なる若者達と日本人

作業員を加えて、増産々々の日々であった。

昭和十四年、日本が初めてソ連とノモンハンで戦った。その強大な機械化部隊に惨敗した帰還兵の中に友人がいるというので駅へ会いにいったが、ホームにたった汽車の窓から姿をのり出した彼と話をすることになった。これからどこへ送られるのかと暗然となったあの日のこと（それが彼とは最後だった）など今でも暗い思い出である。

工場でも日本人の若者はつぎつぎと召集されて、目の前の仕事がいっぱいの明け暮れの中での終戦だ。

これを境に、無警察状態の戦場となり、日本人とみれば集団で襲われ始めた。戦場がある程度始末し、仲間十人ぐらいずつかたまつて、なるべく無人の空地から空地をかけ抜けてやっと帰宅した。仕方なく、会社仲間生活集団を作り、自力で食料や燃料の確保、周辺から攻撃してくるソ連兵、民衆、中国軍団から身を守る毎日だった。そのうちに、だんだんと街が落ちついて、会社で働いていた戦場の中国人の若者が時折心配して訪ねて来てくれるようになり、身の危険もなくな

り、食べる事だけ考えて暮らせるようになった。南満にいたわれ／＼はまだ良いほうだ。北から流れてくるたくさんの人びと、特に女子供の苦勞を目のあたりにして、手を貸すことのできないのが残念だ。

ようやく帰国の話が始めて、私の帰国も決まった。身のまわりの物をふとん袋で造つたりユックにつめて、家の物は全部そのまま、さあ、出発と玄関で子供に靴をはかせていると、暴民が家の中に押し込み、われ先にと家財を持ち出し始めた。それを見ながらなんともいえない気持で家を出た。

駅で待つていたのは石炭用の無蓋貨車で、一昼夜の間、沿道の暴民におびえながら、大連の近くの港町に着き、ここでも床無しの民家の収容所で約一週間、食事も水も満足にとれず、座つたまゝの寝起き。

いよいよ大陸を離れて博多に着いた。感無量である。さあ上陸と思ったら、またストップ、船内に伝染病患者あり、上陸中止、いら立つ心を押さえて三日間港町を眺めていた。

四百余名の自決

長野県 北条 としゑ

北満の東安省鶏寧県、第四次哈達河開拓団長貝沼洋二先生は東京生れで北海道農大卒の開拓精神にもえた立派な方で四十三歳だった。

主人は昭和九年に内原訓練所。十年に満州の奉天訓練所をそれぞれ修了して秋に哈達河開拓団の先発隊として五十二人が入植し、十一年に本隊が入植したので三百人になった。

私は昭和十二年十月開拓団員の花嫁として渡満、主人は二十四歳、私は二十二歳でした。

三年間の共同生活から個人農耕になりつつあつて畑も水田も豊穡にめぐまれランプ生活から電気もつくようになるとのことで開拓地も着々文化の開花が咲き始めた感じでみんな張りきっていました。

二十年八月八日朝、エンジンの音に驚いて窓をあけ